

朝鮮侵略後、初めて日本人が朝鮮の都まで行くことを許された、寛永六年（一六二九）「日本国王使」の唯一無二の記録の続編。副使役を務めた宗家の家老杉村采女の差配により、その家人が書き留めた「私的」日記。近世日朝関係を探るための第一級史料。



2023年7月刊行予定

近世日朝交流史料叢書Ⅲ

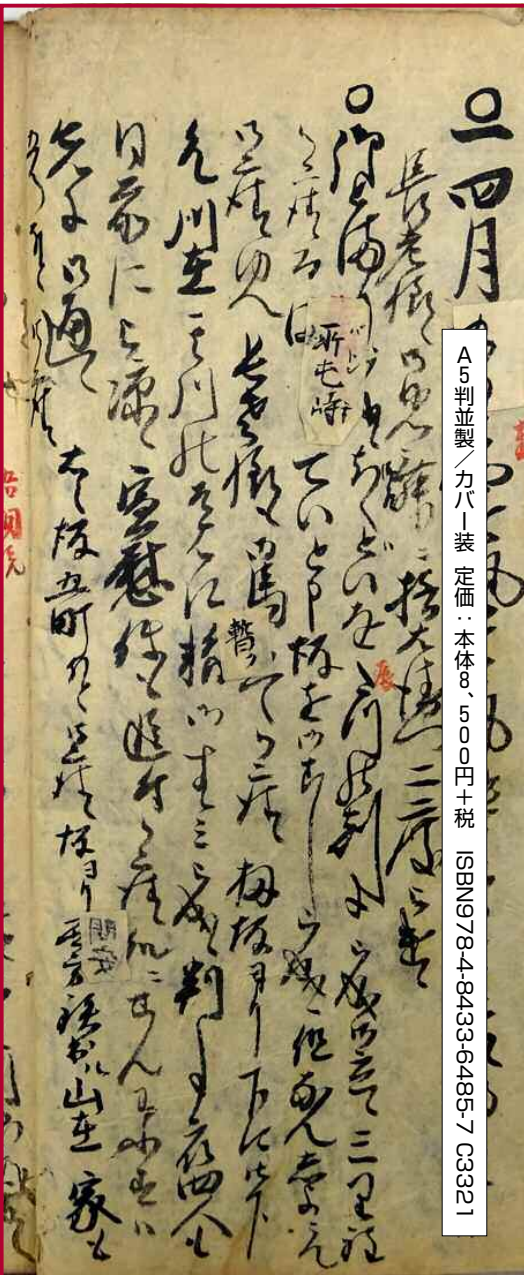
編著

慶應義塾大学名誉教授
田代和生

「日本書紀」のときまじりに

御上京之時毎日記

A5判並製／カバー装 定価：本体8,500円＋税 ISBN978-4-8433-6485-7 C3321



ゆまに書房

電子書籍 同時刊行予定!!

価格等は、KinoDen/Maruzen eBook Library/EBSCO eBooks ほか各サービスにお問い合わせ下さい。

寛永6(1629)年の使節の全体像が浮かび上がる画期的史料。

本書の特色と内容

本書は、寛永6年対馬から朝鮮国の都（漢城）を往復した「日本国王使」の副使役、杉村采女家に伝わる『御上京之時毎日記』の全文翻刻である。前回刊行の『方長老上京日史・飲氷行記』は、同年の「日本国王使」正使、規伯玄方とその応接官、鄭弘溟の記録であった。今回の『御上京之時毎日記』と併せ読むことで、江戸時代唯一の漢城までの日本人使節の全体像が鮮明に浮かびあがってくる。

●底本

『御上京之時毎日記』（ごじょうけいのおときまいにちき） 長崎県対馬歴史研究センター所蔵本（杉村家文書）。

●「解説編」と「影印編」に分けて収録

「解説編」は読み下し文と現代語訳及び註からなる。原文に平仮名で書かれた朝鮮音は語学史研究に貴重な史料であるため、「朝鮮音」の項目をもうけた。なお、底本の写真を掲載した「影印編」と原文通り翻刻した「原文校訂編」も収録し、後学の一助とした。

●編者による詳細な解説と索引

編者による、著者と史料についての時代背景に触れた詳細な解説と、史料活用の便宜を図るための索引を付した。

本文見本 約62%に縮小

御上京の時毎日記（解説編）

（8） 僉官としての役儀「僉官」は送使船の使節員のこと。「役儀」は、副使杉村采女の良の役回り、すなわち未取公木（木綿）の回収交渉のことを指す（詳細は解説参照）。

（9） 客館 上京使の都での宿舎（四月二十二日註13）。

（10） 予定 原文「一五」は「筈」の誤字（四月九日註13）。

四月二十五日。こち風。天気よく長閑に御座候。早々長老様へ御見舞に格右衛門を遣わされ候。一、長老様、肅拜にたつ時に御出なされ候。御供の衆は、徐蔵司・加右衛門・源右衛門・源右衛門・仕り候。則ちしようぞくにて罷り出候。此衆四人は別座敷、又下々の者共四人、是は別座敷にして振舞の由に候。御だいら、結構に御座候由に候。二時ほどすぎ候て、頓て御帰りなされ候。

○御だいらの様子、あま戸もあかずにして御座候。庭にはいなされ候由に候。崔判事・尹判事などに、此方へ御帰りなされ候て仰せられ候は、前座はあま戸などあき申し候て、則ちみずをはしらかし、王様も御覧なされ候処、左様にも御座なく候。刺庭にはい御させ候事は、弥日本人を御なぶりなされ候かと存じ候由、條々仰せられ候。今日御肅拜に、王より御音物など御座候。数々の事は應じかき載せ申し上げず候。右よりも堅く仰せ付けられ置き候故、色々はかき載せ申し上げず候。明日は、礼曹にていはちにて御座候。其御誘引にて御座候。○だいらに御参りなされ候時、門番鎧候て、鉄砲・弓をもたせ候て置かれ候由、仰せられ候。殊の外、御行儀稠敷由に候。

朝鮮音

84

「方長老上京日史」では正使規伯玄方は、慶徳宮正殿の階段を上って殿舎に進み、そこで国王に対して四拜礼(肅拜)を行ったとされるが、『御上京之時毎日記』では全く異なった状況が描かれている。

『御上京之時毎日記』は、寛永6年の使行記録であるが、前回刊行の正使規伯玄方の『方長老上京日史』と全く異なるのは以下の点である。

【1】正使玄方の『方長老上京日史』が、帰国後かなりの歳月を経て対馬藩主に上呈された「公的」報告書であるのに対し、『御上京之時毎日記』は副使役を務めた宗家の家老杉村采女の差配によりその家人が書き留めた「私的」日記である。

【2】内容も、杉村采女の意図に従い、道程の観察、具体的な接待内容や交渉ごと、それらをめぐる感情の起伏や使行員の雑談、朝鮮側高官との仲介を務める倭学訳官（日本語通事）らの物言いに至るまで、その現場にいるものならではの具体的な体験が書かれている。

本文見本 約62%に縮小

御上京の時毎日記（4月）

いはち いまぢ イバチ（四月九日註12）

【訳註】

四月二十五日。東風。天気は良く穏やかである。早朝、※長老様（規伯玄方）のご機嫌伺いに※格右衛門（源右衛門）を遣わされる。

一、長老様は、肅拜のため辰の時間にお出かきになった。供は、※徐蔵司（玄徐）・※加右衛門（松尾加右衛門）・※源右衛門（鶴田源右衛門）・※源右衛門（下田源右衛門）らが務め、皆正装である。この四人は別座敷に入り、また下々の者四人はこれと異なる別座敷で供応されたという。御内裏は、結構な構えであったという。二時ほど過ぎて、間もなく御帰りになった。

○内裏の様子は、兩戸も開かず、庭で肅拜をなされたという。※崔判事（崔義吉）や※尹判事（尹大徳）等がこちらへ戻り、「以前は兩戸も開いて、御簾を張りわたし、王様も御覧になられたが、（今日は）そのようなくともありませんでした。それどころか庭で肅拜せるとは、いよいよ日本人を馬鹿にしているのかと思われます」と言った。今日の肅拜で、王から下賜品があった。数など詳しい事は、わざと書き載せない。これは前から堅く命じられていたことで、品目も書かないことである。明日は、礼曹王催の宴会があり、その誘いがあった。○内裏に行った時、門番は鎧を着て鉄砲・弓を持って配置されており、たいそう規律が厳しかったとのことである。

（1） 肅拜 朝鮮国王への拝礼儀式（四月二十三日註3）。この日の肅拜は国王へ初めて行われる「進上肅拜」に相当する（海東諸国記「朝聘応接紀」内裏）。

（2） 辰の時 午前八時前後。

（3） 御内裏 王宮のこと。当時は都の西方、慶徳宮が王宮とされていた。

85

◆好評発売中◆

- I 『通訳酬酢』 小田幾五郎、近世後期
定価：本体5,800円＋税 ISBN978-4-8433-5167-3 C3321
- II 『方長老上京日史・飲氷行記』
規伯玄方・鄭弘溟、寛永6年
定価：本体8,500円＋税 ISBN978-4-8433-5903-7 C3321



表図版：(上右) 杉村采女知廣画像（長崎県対馬歴史研究センター所蔵）／(上左) 『御上京之時毎日記』原文（長崎県対馬歴史研究センター所蔵）／(下) 当時日本の使節一行が宿泊した漢城の宿泊所（現ソウル特別市・郵政総局／2019年8月鄭成一氏撮影）

ゆまに書房 〒101-0047 東京都千代田区内神田2-7-6 TEL .03 (5296) 0491 FAX.03 (5296) 0493 http://www.yumani.co.jp/

ご注文書	ゆまに書房 Tel.03(5296)0491/Fax.03(5296)0493 年 月 日		取扱店
	御上京之時毎日記 近世日朝交流史料叢書Ⅲ 定価：本体8,500円＋税 ISBN978-4-8433-6485-7 C3321		
お名前			
ご住所			
TEL ()			

※毎度ありがとうございます。お申し込みはぜひ当店へ。